



Title	看護師の専門職倫理 : ヘーゲル哲学における「知」と思考 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石川, 洋子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7193号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91197">http://hdl.handle.net/2115/91197</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hiroko_Ishikawa_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 石川 洋子

主査 教授 藏田 伸雄  
審査委員 副査 教授 宮嶋 俊一  
副査 准教授 樋口 麻里

## 学位論文題名

看護師の専門職倫理  
—ヘーゲル哲学における「知」と思考—

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

従来の看護倫理では「ケア」はその中心となる概念であり、ケアは看護職の専門職倫理にとって重要な役割を果たすとされてきた。だがケア概念は非対称的な人間関係の中で理解され、また共感などの感情をもとに論じられることが多い。さらに近年は看護倫理の中で、道徳的感受性について着目されることが多いが、その内実について十分に分析されることは少ない。

このようなケア概念と、それをもとした看護師の専門職倫理の理解に対して、石川氏は共同知としての良心という概念をもとに、ケア概念の新たな理解を示し、それをもとした看護師の専門職倫理を提案している。

本論文で石川氏は、「看護の本質とは何か」という問いを設定し、この問いに対してヘーゲル哲学における良心概念を用いて答えることを試みている。このような問題設定は、哲学とは現実的なものの本質を考えることだとするヘーゲル的な哲学観にもとづいている。看護倫理についてはすでに内外で膨大な先行研究があるが、本格的なヘーゲル研究を看護に直接結びつけた研究は世界的にも例をみない。

本論文ではケアについて、ケアするものの視点からみることの問題点が指摘され、医療ケアにおいてはケアするものとケアされる者との間の双方向性が必要であることが強調されている。ケア概念はともすれば「ケアする者とケアされる者」という形で非対称的に理解されることが多く、そこでは濃厚な人間関係が想定されがちであることを石川氏は指摘している。本論文ではそれに対して、ヘーゲルの「良心」概念を手がかりとして、相互的な関係と「知」に重きをおく新たなケア概念の理解が提示される。これは一般的な看護倫理におけるケア理解に一石を投じるものである。さらに本論文はヘーゲルの陶冶の概念に着目し、それを看護師の専門職倫理に結び付けている。

また現代の代表的なメタ倫理学における感受性理論の代表者であるマクダウエル感受性概念を用いて、看護職にとって必要な感受性とはどのようなものかを明らかにしたことも本論文の成果である。

さらに本論文は看護倫理における新たな分析枠組みを提示しただけでなく、看護師のアドボカシーについての批判的分析も踏まえた看護職の自律に向けた提言ともなっている。このように専門職としての看護師の自律性と専門性という観点からアドボカシーについて論じたことも本論文の成果である。

### ・学位授与に関する委員会の所見

本論文で石川氏は難解で知られるヘーゲルの『精神現象学』をドイツ語原文に即して緻密に解釈した上で、特にその良心概念を「ケア」の理解に応用している。このような試みは世界的にも例をみないものであり、筆者の野心的な試みは審査委員会によって高く評価された。

このように本論文の研究成果は極めて重要なものであるが、本論文に対しては、審査委員からい

くつかの疑問が呈された。

まず副題が「ヘーゲル哲学における「知」と思考」とあるが、主にヘーゲル哲学を論じているのは第3章と第6章だけであり、この副題は適切ではないのではないかという指摘もあった。この点については、本論文の基礎となっているのはヘーゲル哲学であり、第2章で論じられているヒュームやシェーラーの哲学も、ヘーゲル哲学の有効性を示すために扱われていることが口述試験の際に述べられた。

また看護の「本質」を想定し、それが何かを明らかにしようとする本論文の問題設定は、専門職について構成主義的に理解されることの多い現状に即していないのではないか、という疑問も示された。さらにケア概念はジェンダーと結びつけられて理解されることも多く、また看護職は女性が多いにもかかわらず、その点についての言及がないことも指摘された。また看護職のアドボカシーについて論じている第5章と他の章との関連が明らかではない、という問題点も指摘された。そして本論文で石川氏が論じているケアについての理解は看護職のみならず、他の対人援助職にも妥当するのではないか、という指摘もなされた。口述試験の際に石川氏はこれらの問題点を認めつつも、ヘーゲル哲学をもとにケア概念と看護師の専門職倫理について検討するという本論文の方法論について改めて説明がなされた。

本論文において、看護師は一人の人間としての患者の前に、対等な人間として出会う必要がある、という石川氏の確信がヘーゲル哲学と結び付けられている。また看護師として長年勤務してきた石川氏の経験も本論文の内容に反映されている。こういった点も考慮すると、以上の問題点は本論文の試みの重要性を損なうものではないと判断された。以上の審査結果にもとづいて、本論文審査委員会は、本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。